

01	名古屋	二城小学校	オノギ チアキ 名前 小野木 千愛
分科会番号	14	分科会名	特別支援教育

研究題目 自己理解・自己管理能力を高める児童の育成
—「自分のよさや可能性の理解」と「学習や活動における自己調整」を通して—

1 研究のねらい

私は、自己理解・自己管理能力を高める児童を育成したい。本研究における「自己理解・自己管理能力を高める児童」とは、自分のよさや可能性を理解するとともに、学習や活動において自身の行動を調整することができる児童である。

本学級に在籍するA児は、自分の興味や関心のあることに対して粘り強く取り組むことができる。しかし、課題解決の過程においては、自ら方法を見直したり改善したりすることが難しく、同じやり方を繰り返す傾向が見られる。そのため、努力しているにもかかわらず、期待した成果につながらないことが多い。また、「どうせできない。」と発言する姿がしばしば見られ、自分のよさや可能性を肯定的に捉えることに難しさがあると考えた。このような姿が続くと、自分の力を十分に発揮できなくなる可能性があると考えられる。これは、A児の現在の学習や活動における課題であるとともに、将来的な社会的・職業的自立を支える基盤となる能力の育成にも関わる課題であると考えた。

そこで、自分のよさや可能性を捉え、社会的・職業的自立を支える能力を育成する点から、キャリア教育の視点を取り入れることが有効であると考えた。文部科学省は、中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」において、キャリア教育で育成すべき基礎的・汎用的能力の一つに、自己理解・自己管理能力を挙げている。自己理解・自己管理能力については、「自分が『できること』『意義を感じること』『したいこと』について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すること」であると示している。また、主体的な学びについて言及する中で「見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげるもの」と示しており、児童が自ら学習を調整しながら学ぶことの重要性も示している。これらのことから、自己理解・自己管理能力を高めるためには、自分のよさや可能性を肯定的に理解するとともに、学習や活動において自らの取組を振り返り、次の行動を選択したり、修正したりしていく自己調整できる力を育成することが必要であると考えた。

本研究では、A児の実態を踏まえ、自己理解・自己管理能力のうち、自己理解の側面である「今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解」を「自分のよさや可能性の理解」、自己管理の側面である「主体的に行動する力」を「学習や活動における自己調整」と具体的に捉える。そして、これらの力を育成するためには、児童が日常的に自らの成長を意識し、実感できることが重要であると考えた。そこで、自己理解・自己管理能力の育成を支える基盤となるよう、基礎的・汎用的能力を意識し、自らの成長を実感できる活動を日常実践として継続的に行う。その上で、これらの育成のために、二つの手立てを講じる。自己理解の側面では、自分や友達のよさを見付ける活動を通して、自分のよさや可能性への理解を促す。自己管理の側面では、ポートフォリオを活用した学習の振り返りを通して、課題に対して自分で解決をしようしたり、必要に応じて他者への助言を求めることができたりするよう、学習や活動の中で、進め方を自ら調整する力を育成する。そして、これら二つの働き掛けを通して、自己理解・自己管理能力を高める児童の育成をめざす。

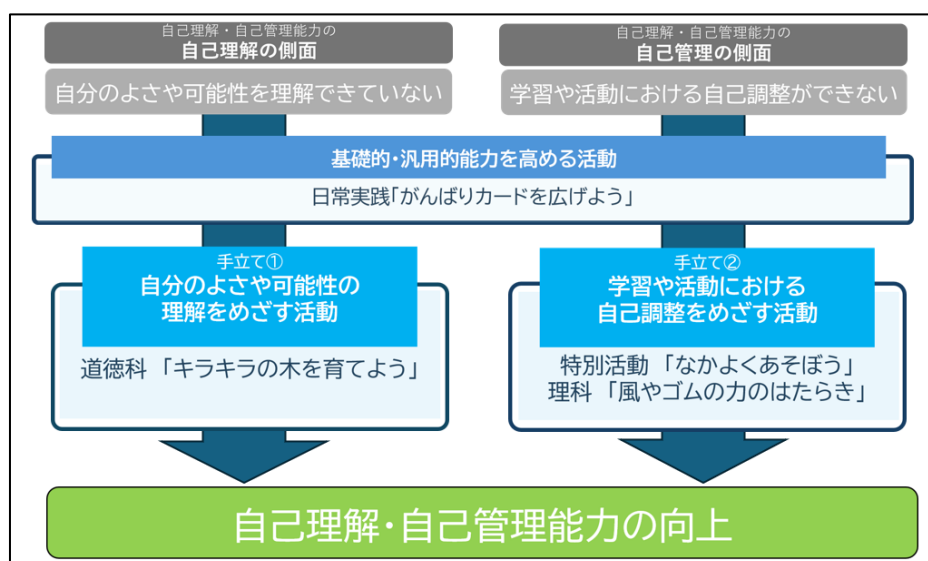
2 研究の構想

(1) 対象児童 自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する児童1人(以下A児)

(2) 児童の実態

A児	- 好きな学習や活動に対して熱心に参加することができる。 - 自分の好きなことや興味を理解している。 「どうせできない。」等と発言する等、自分のよさや可能性に気付いていない。 - できない、難しいと感じた学習や活動に対しては前向きに取り組むことが難しい。 - 交流学級の友達に話し掛けられても、対応することができない。
----	---

(3) 研究構想図



(4) 手立ての具体

「自分のよさや可能性の理解」をめざす手立てと、「学習や活動における自己調整」をめざす手立て、日常実践におけるキャリア教育の視点を取り入れた活動の具体を以下に記載する。

【日常実践】キャリア教育の育成すべき四つの能力を高める活動

- 基礎的・汎用的能力がどの程度育っているのかを視覚的に理解する。
- 基礎的・汎用的能力のうち、A児自身にとって必要な能力を高める。
- 基礎的・汎用的能力を伸ばすことができれば、協働学習支援ソフト「ロイロノート・スクール」(以下「ロイロノート」)上で「がんばりカード」を操作し、成長を実感する。

【手立て①】自分のよさや可能性の理解をめざす活動

道徳科「キラキラの木を育てよう」

- 自分のよいところや友達のよいところを見付け、「キラキラの木」に貼る。
- 友達のよいところを見付けたり、友達に自分のよいところを見付けてもらったりすることで、自分のよさや可能性を理解する。
- 自分の弱点を知り、強みにリフレーミングする。
- 全校児童への働き掛けにより、自分のよさや可能性を理解する。

【手立て②】学習や活動における自己調整をめざす活動

特別活動「なかよくあそぼう」、理科「風やゴムの力のはたらき」

- 毎時間振り返りとしてポートフォリオを書き、よりよく改善するための方法を考える。
- 交流学級の児童や上級生、教師の問い掛けを基に、次の行動を選択、修正する。

3 研究の内容

(1) 日常実践「がんばりカードを広げよう」

ア 実践の様子

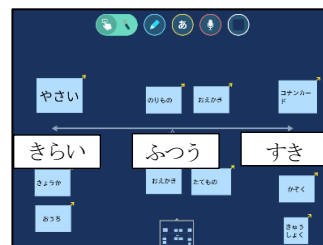
本学級では、人間関係形成・社会形成能力を「かかわる力」、自己理解・自己管理能力を「みつめる力」、課題対応能力を「とりくむ力」、キャリアプランニング能力を「つなげる力」として基礎的・汎用的能力の四つの力を分かりやすく示した。基礎的・汎用的能力はそれぞれが独立したものではなく、相互に関連・依存した関係にある。



【写真1 A児のがんばりカード】

そこで、日常実践において、A児が自分の成長を振り返り、意識することができるための基盤として、四つの力を視覚化した「がんばりカード」を使用した【写真1】。「がんばりカード」は四つの力を伸ばすための、具体的な行動が升目に示されており、児童が行動を達成することで宝石をはめていくものである。宝石は、四つの能力ごとに色分けして提示し、ゲームやアニメが好きなA児の興味関心を引くことができるようにした。

A児は、特に自己理解・自己管理能力の向上のために「好きなこと・苦手なこと」を見付ける活動で熱心に取り組む姿が見られた。最初、A児は「好きなことは分からない。」と話していた。しかし、A児は学級の友達や教師の話を聞くうちに、自分の好きなものや嫌いなものを思い出し、ロイロノートでまとめることができた【写真2】。A児は活動後、「がんばりカード」の「みつめる力：すきを見つける・にがてをやる」の升目に宝石のモチーフをはめ、うれしそうにしていた【写真3】。



【写真1】 A児の好きなこと・苦手なことを見付ける活動の画面



【写真2】 がんばりカードを操作するA児の様子

イ 成果と課題(○成果、●課題)

○ A児は基礎的・汎用的能力の成長を視覚的に理解し、自覚することができた。

● 基礎的・汎用的能力について、同じ項目を繰り返し高めることができる工夫が必要だった。

(2) 自分のよさや可能性の理解をめざす活動（手立て①）

ア 活動の様子

キラキラの木を育てよう

道徳科「キラキラの木を育てよう」では、第1時、より多くの人の中で考えを深めることができるように、交流学級の児童と一緒にお互いのよいところを見付ける活動を行った【写真4】。A児はペアや班を組み、まず、相手のよいところをワークシートから選び○を付けた。その後、相手の一番よいところだと思うことをハートの付箋に記述し、渡して伝え合った。A児は、初めは緊張した面持ちをしていたが、交流学級の友達から声を掛けられると、活動に参加することができた。交流学級の友達から、A児のよいところをたくさん見付け、伝えられていた。

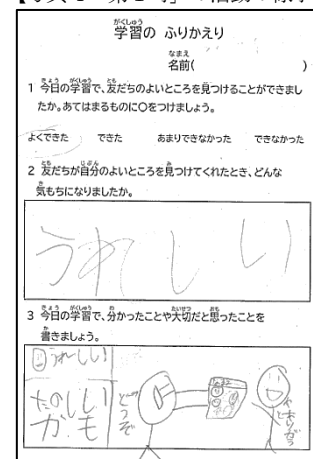
振り返りには、感想として大きな文字で「うれしい」と書き込まれていた。分かったことや大切だと思ったことには「うれしい」「たのしいかも」という言葉とともに、交流学級の友達との関わりを絵にして表すことができた【写真5】。

第2時では、本学級で自分の弱点をリフレーミングする活動を行った。まず、架空の人物の弱点を見せ、弱点は強みに言い換えることができることを伝えた。その際、スライドを使って弱点を裏返すことで強みになることを視覚的に確認することができるようにした。A児はスライドで裏返る弱点と強みを何度も操作し、自分の弱点も強みに変えることができることを実感することができた。

第3時では、自分のよいところや友達のよいところ、自分の弱点をリフレーミングしたよいところをハートの付箋に書き「キラキラの木」に貼って、よいところに気付く活動を行った。丸型の付箋には自分のよいところを、ハートの付箋には友達のよいところを書き「キラキラの木」に貼ることによって、「キラキラの木」を育てることになった。A児は、友達が自分のよいところをたくさん付箋に書いたことで、自分のよさを実感し、とてもうれしそうな表情が見られた。また、A児も友達のよいところをたくさん見付け、伝えることができた。しかし一方で、A児は自分のよいところに関して、あまり多く書くことができなかった。自分のよいところを本学級や交流学級の友達から見付けてもらったが、まだ自分のよさを理解しきれていないようであったため、より多くの人からよさを見付けてもらう機会を増やす必要があると考えた。



【写真4】「第1時」の活動の様子



【写真5】 A児の書いた振り返り

そこで、A児が自分によいところがあることをより強く感じることができるよう、本学級にとどまらず、活動を全校に広めることにした。まず、学級で学んだ、自分の弱点を強みに変えることができること、誰にでも必ずよいところがあることを、交流学級である3年生に直接紹介した。そして、「キラキラの木」を育てる活動をしていくことや、一緒に活動に参加してほしいことを伝えた【写真6】。



【写真6 交流学級に出向き発表を行うA児】

また、その日の午後には、「キラキラの木」の活動を、校内放送を使って全校に紹介をし、一緒に参加してほしいと呼び掛けを行うことにした。A児は、放送することに対して、「やりたくない。」と話していたが、放送後、交流学級や他学年の児童、教職員から「放送すごかったね。」「頑張っていたね。」等と声を掛けられ、とてもうれしそうにしていた。また、放送を聞いたたくさんの方が活動に賛同し、参加してくれたことにより、後日の2回目の放送では前向きに参加することができた。自分たちの呼び掛けによって多くの方が活動に参加してくれたことや、交流学級の友達や他学年の児童に頑張りを認められたことによって、2回目の放送の後には、満足げな表情を見せていた【写真7】。また、全校の児童が自分たちと一緒に参加をしたことで大きく成長した「キラキラの木」をしみじみと眺め、教師に「すごい。」「やばいくらいいっぱい。」と話していた。自分たちの呼び掛けに対して、多くの方が活動に参加してくれたことや、努力が認められた経験は、やればできるという自分の可能性を理解することにつながった。



【写真7 「キラキラの木」の活動に参加する全校児童】

イ 成果と課題(○成果、●課題)

○ 自分のよいところを見付けたり、友達から見付けてもらったりする活動や、全校に働き掛ける活動を通して、A児は自分のよさや可能性を理解することにつながった。

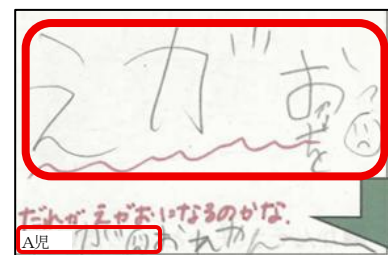
● 全校での「キラキラの木」の活動期間をもっと長く取ることで、A児と全校児童の関わりを増やす工夫が必要であった。

(3) 学習や活動における自己調整をめざす活動（手立て②）

ア 活動の様子

特別活動「なかよくあそぼう」

特別活動「なかよくあそぼう」の単位では、仲良く遊ぶとはどんなことなのか、どうすればよいのかについて考え、実践を行った。第1時では、「なかよくあそぶ」とはどういうことかをポートフォリオに記述した。するとA児は「たのしく」「えがおを？」と記述した。そこに教師が「だれが笑顔になるのかな」とコメントすると「(A児の名前)が」と記述した【写真8】。このことから、A児は仲良く遊ぶことを、自分が楽しく笑顔で遊ぶことであると考えていることが分かった。実際にみんなで遊んだ後の振り返りでは、今日の授業で一番大切だと思ったことを「ぜんいんえがお」とポートフォリオに記述した。それに対して教師から「全員が笑顔になるために、どうするとよいか？」とコメントをした。



【写真8 「なかよくあそぶ」についての学習前の記述】

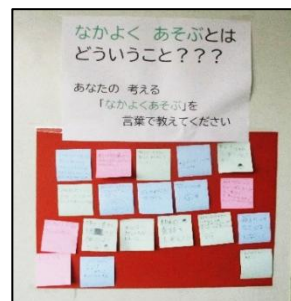
第2時に教師からのコメントを参考にし、どうしたら仲良く遊ぶことができるのかを考えながら遊びに参加した。A児は振り返りとしてポートフォリオに、「たのしく」「おこらない」「ふざけない」「じゅんばんをまもる」等と記述した。第3時にはたくさんの考えをポートフォリオに記述することができたが、新たに「こえをかける」「ルールをおしえる」等と記述することができた。それに対して教師が「この中で一番大切なのはどれかな？」とコメントすると、第4時には「なかよくする」と記述し、笑顔の3人のイラストを描いた【写真9】。ポートフォリオに記述し、調整を行う



【写真9 A児のポートフォリオの記述】

中でA児は、仲良く遊ぶことは自分だけが楽しく笑顔になることではなく、友達も笑顔でいられるようにすることであると気付くことができた。

しかし、A児は自分も友達も笑顔でいられるためには、具体的にどうしたらよいかが分からず、困っている様子が見られた。そこで、6年生に「仲良く遊ぶためにはどうすればよいのか」を聞くことにした。本学級は6年生の教室の隣にあるため、「仲良く遊ぶためのアイデア募集」を本学級の廊下掲示板に貼り、アイデアを募った【写真10】。また、そのアイデアを試すために、実際に6年生と一緒に遊び、アイデアのよさを体感した。単元の最後の問いである「なかよくあそぶとは」についてA児は「おこらない」「こえをかける」と記述した。6年生との交流を経て、A児は「なかよくあそぶ」ための必要なことについて、自分なりの考えをもつことができた。



【写真10 仲良く遊ぶためのアイデア募集板】

理科「風やゴムの力のはたらき」

理科「風やゴムの力のはたらき」では、風やゴムの力を使ったよりよいおもちゃを制作する活動を行った。第1時の最初では、A児はどうやって動くおもちゃを制作したらよいのか見当が付かないようであった。授業の中盤に差し掛かると、A児はゴムの力の働きを使った実験キットを使って制作した車を走らせた。ゴムをたくさんねじることで、車が遠くまで動くことに気付くことができた。

第2時、A児はゴムの力で動く車を自分で制作しようとしたが、うまくいかなかった。その日の振り返りには「どうやってつくればよいの」と記述した。そこで教師が「どうしたら分かるんだろう?」「だれにきいたらよいか?」とコメントした。第3時にA児は「自分の飼っているカメをおもちゃにした」という思いから「がんばってカメをゴムでつくる」「カメをどうしたらうまくできるの」と記述した。そこで教師が「うまくできるとどういうこと?」とコメントした。するとA児は「はやくうごかしたいです」と記述した。



【写真11 A児のゴムで動くおもちゃ作りのポートフォリオ】

そこで第4時では、早く動くカメのおもちゃの制作を行った。A児は教師に相談をしたり、自分でタブレットを使って仕組みを調べたりして、おもちゃのカメを動かす仕組みを作ることができた。しかし、何度も繰り返し試し、素材を変えた2種類のおもちゃを制作したが、手で仕組みを操作せず、おもちゃを床に置いた状態で後方にスライドさせたことで早く動くおもちゃを作ることができなかった。その日の振り返りには「さいしょにでんちをくるとまわすとまあまあうごく」「どうやったらじめんでうごかすの」と記述した。そこで教師が「だれにきこう?」とコメントした。するとA児は、第3時の教師のコメント「だれにきいたらよいか?」の近くに「6年2くみ」と記述した【写真11】。



【写真12 6年生にアドバイスをもらうA児】

A児の記述から、6年生と一緒に活動し実際に教えてもらうことにした。6年生のアドバイスを基に、A児は更に改良を加え、床で走る車を制作することができた【写真12】。

また、本学級にはA児の他に交流学級の児童にアドバイスをもらいたいと考える児童がいた。そこでA児を含む本学級の児童で交流学級に出向き、一緒におもちゃの制作を行った。そこで様々なアイデアを見たり聞いたりすることができ、A児のその後の活動に生かすことができた。6年生や交流学級の友達と関わることで、自分だけでは完成させることができなかった動くおもちゃを、最後まで制作することができた。

イ 成果と課題(○成果、●課題)

- ポートフォリオへの振り返りと、教師からの問い掛けを通して、次の行動を考えることができた。
- 交流学級や6年生と関わり合いながら学ぶことで、A児は考えを深め、学習や活動における自己調整につながった。
- ポートフォリオの中に、A児が毎時間目当てを意識できる工夫を盛り込む必要があった。

4 研究のまとめ

本研究では、自己理解・自己管理能力を高めることをめざし、実践を行った。

日常実践では、A児が自分の成長を視覚的に捉えられるようにするとともに、自己理解・自己管理能力を含む基礎的・汎用的能力を日常的に意識できるようにした。このことは、その後の手立て①、②において、A児が自分のよさや成長を捉えたり、学習や活動を振り返ったりするための基盤となったと考える。

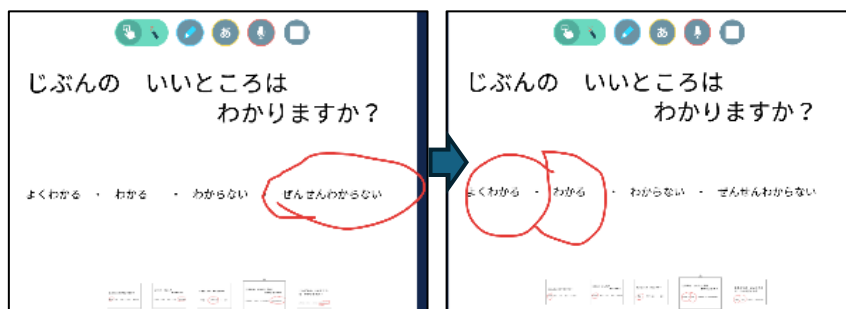
手立て①では、自分のよさや可能性の理解をめざした。本学級のみならず、交流学級の児童との関わりの中で、自分では意識していなかった部分も、自分のよいところであると捉えることができた。また、自分の弱点を強みに言い換えるリフレーミングの活動を通して、苦手だと思っていた自分の一面も、見方を変えればよさとして捉えられることを実感することができた。

また、全校に放送で呼び掛ける活動では、全校児童が、A児や本学級の児童に対して、よいところを伝えてくれたり、他の児童のよいところが、自分にも当てはまるよいところであることに気付いたりすることで、A児が自分のよさをより強く感じることに繋がった。同時に、全校に対して呼び掛けることに抵抗があったが、多くの人が参加したことにより、自分はやればできるという自分の可能性に気付くことができた。以上のことから、手立て①が自分のよさや可能性を理解することに有効であったと考える。

手立て②では学習や活動における自己調整を行うことをめざした。A児はポートフォリオへの振り返りと、教師からの問い掛けを通して、次の行動を考えることができた。そして、次の行動を選択したことにより、交流学級の児童や上級生と関わる中でよりよい考えを知り、取り入れることができた。このことも、A児が学習や活動における自己調整を行うことに結び付いたと考えられた。以上のことから、手立て②が学習や活動における自己調整を行うことに有効であったと考える。

5 児童の変容

実践前「自分のよいところはわかりますか」の質問に「ぜんぜんわからない」と回答した。しかし実践後は「よくわかる」「わかる」と回答した【写真13】。また実践前、A児から「どうせできない。」と発言することが多く見られたが、実践後はほとんど見られなくなった。また、学習や活動において自分のよさや可能性を理解するための実践を行ったことによって「やればできる」という思いをもつことができるようになったことがうかがわれた。実践後、苦手な活動であっても「まあやってみようか。」とつぶやき、取り組む姿が見られた。



【写真13 A児の実践前後の自分のよいところへの理解の変容】

また、A児は学習や活動で行き詰まると、プリントに「しらない」「わかんないよ」等と記述し、活動に参加できないことがあったが、どうやったらうまくいくのかを自分で調整する姿が見られた。理科「音のふしぎ」において糸電話を作る場面では、うまくいくように何度も試行錯誤する姿が見られた。その日の学習や活動の振り返りには「がんばった」と記述する等、学習や活動における自己調整ができるようになったことで、学習や活動に前向きに参加できるようになったことがうかがえた【写真14】。

また、A児は学習や活動で行き詰まると、プリントに「しらない」「わかんないよ」等と記述し、活動に参加できないことがあったが、どうやったらうまくいくのかを自分で調整する姿が見られた。理科「音のふしぎ」において糸電話を作る場面では、うまくいくように何度も試行錯誤する姿が見られた。その日の学習や活動の振り返りには「がんばった」と記述する等、学習や活動における自己調整ができるようになったことで、学習や活動に前向きに参加できるようになったことがうかがえた【写真14】。



【写真14 A児の振り返りの前向きな記述】

今後も自己理解・自己管理能力を更に高めることで、「やればできる」という思いをもつことができる機会を増やし、よりよい未来に向けて前向きに進むことができるよう、支援を続けていきたい。

【引用文献】文部科学省(2011)：中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」